

続く挑戦、未来をつむぐ

大雄会の挑み人

スタッフ特別インタビュー

総合大雄会病院
救命救急センター
救急救命士



社会医療法人大雄会 総合大雄会病院 救命救急センターEMT科班長。救急外来での医師の診療介助、ドクターカーや院内救急車の運行などに携わる。令和6年5月にEMT（Emergency Medical Technician）科として独立した現在も、医療機関で働く救急救命士の認知度向上に努めている。

※所属・肩書等は取材時（2024年9月時点）のものです。

続く挑戦、未来をつむぐ。



社会医療法人
大雄会

大雄会は、共に未来をつむいでいく仲間を募集しています

募集職種・条件等は、お気軽に
採用担当までお問い合わせ下さい

採用担当
直通電話

0586-24-8891

受付（平日のみ）
8:30～17:30



大雄会でのお仕事とやりがいを教えてください。



救急外来での医師の診療介助、ドクターカーや院内救急車の運行など救急医療に携わる仕事を行っています。

当院は救命救急センターが設置されているということもあり、緊急度・重症度の高い患者さまが多く来院されます。そのような患者さまが無事退院された事を知ると、この仕事に就いて良かったと実感します。

また当院は、有難いことに令和6年9月に100周年を迎えました。それだけの歴史もあり、地域の方々から「大雄会に来て良かった。ここじゃなきゃダメ」と言ってもらえると、大雄会の一員として働けることに、誇りをもつこともできます。

救急救命士になろうと思ったきっかけは何か？

私は前職で介護の仕事に携わっていたのですが、利用者さまは当然ご高齢の方が多く容体急変の場面にも多く直面しました。その様な場面を経験していく中で、「自分も人を救えるようになりたい、誰かの役に立ちたい」と思い、医療の最前線が現場となる救急救命士を志しました。



今後、大雄会でどんなことに挑戦したいですか？

従来救急救命士は消防機関が主な就職先で、私達のように医療機関に務める者は少数でした。その要因として救急救命士法の縛りが大きな壁でしたが、令和3年10月の救急救命士法改正を受けて医療機関で働くことを希望する者も徐々に増え、当院にも9名の救急救命士が在籍しています。

そのおかげもあり、私達は令和6年5月に救急救命士単独の科、EMT（Emergency Medical Technician）科として独立することが出来ました。しかし認知度とはいうと、EMT科はおろか、そもそも救急救命士自体何をしていて、どの様な事が出来るのか？など院内外問わず低いのが現状です。

当院には1名女性の救急救命士がいます。彼女は経験こそまだ浅いですが、院内で働く救急救命士としてどうすれば世間に認知され、自分たちの働き方を確立していけるのかを摸索し、自分に出来ることを体現してくれています。その一環として、心肺蘇生講座のインストラクターの資格を取得したり、地域イベントなどに積極的に参画してくれています。当院では地域イベントへ関わることも多く、彼女はこのような機会を通し、地域医療に貢献できることにやりがいを感じています。

私達は言わば、院内で働く救急救命士の基礎となる世代だと自負しています。私は今後、彼女のような頼もしい仲間達と共に、未来の救急救命士達の為にもより多くの方に自分達を知って貰えるよう、一層努めていきたいと思っています。



EMT科唯一の女性救急救命士(右)。



地域のイベントに積極的に参加。